

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：16301  
 研究種目：基盤研究(B) (一般)  
 研究期間：2016～2019  
 課題番号：16H03694  
 研究課題名(和文) 軍事被害を不可視化させる社会構造に関する総合的研究 - 沖縄、本土、太平洋諸島  
  
 研究課題名(英文) Comprehensive research on social structures that make the damage from military activities invisible: Okinawa, Mainland Japan and the Pacific Islands  
  
 研究代表者  
 朝井 志歩 (ASAI, Shiho)  
  
 愛媛大学・法文学部・准教授  
  
 研究者番号：70405091  
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,200,000円

研究成果の概要(和文)：環境社会学会が発行する『環境社会学研究』第25号で「環境社会学からの軍事問題研究への接近」という特集が生まれ、研究代表者と研究分担者3名の計4名が論文を発表した。また、2020年2月22日に東京の明治学院大学で「軍事化が進む社会」という公開シンポジウムを企画し、開催した。本研究の研究代表者や研究分担者らがそれぞれのこれまでのフィールドでの研究成果を報告した。各報告に対して3名のコメンテーターがコメントし、聴衆として参加した約70名の一般の方々から各報告に対して盛んに質疑応答が行われた。

研究成果の学術的意義や社会的意義  
 軍事基地の建設や拡張などの軍事的な活動の広がりによって各地域がいかに変容したのかを、沖縄、岩国、京都府京丹後宇川、グアム、北マリアナ諸島、マーシャル諸島でフィールド調査を通して解明した。地域社会で広がる「軍事化」の実態を実証研究に基づいて明らかにし、軍事化が地域社会の環境や自己決定性や住民の意識に及ぼす影響を及ぼし、地域社会をどのように変容させるのかを示した。また、こうした変化が社会に及ぼす効果についても考察し、軍事によって引き起こされる被害を広く捉える視点を提示した。

研究成果の概要(英文)：The principal investigator and 3 co-investigators published articles in Vol. 25 of the Journal of Environmental Sociology, published by the Japanese Association for Environmental Sociology. This was a special issue on “Approaching Research on Military Issues from the Perspective of Environmental Sociology.” In addition, on 22 February 2020, the project group planned and held a public symposium at Meiji Gakuin University entitled “Societies with Advancing Militarization.” The principal investigator and each of the co-investigators presented their findings about their own field work. Three commentators gave their comments on these presentations. In addition, there were many questions from the approximately 70 people who attended the event, which resulted in lively discussion.

研究分野：環境社会学

キーワード：軍事 被害 米軍基地 地域社会 環境問題

### 1. 研究開始当初の背景

軍事に由来する被害は、平時においても深刻な問題を引き起こしている。その社会的な影響について分析するためには、軍事基地それ自体の存在や、基地を拠点として行われる、平時の日常的な訓練が、地域社会や個人の生活などにもたらす被害に着目する社会学的な研究をする必要のあることが認識され、研究代表者を中心に「軍事・環境・被害研究会」が2009年に立ち上げられた。本研究会では、2013年度から2015年度まで文部科学省の科学研究費補助金の基盤研究(C)「軍事が地域社会に及ぼす影響に関する総合的研究」の交付を受け、これまで共同研究を進めてきた。本研究は、2015年度まで受けてきた科研費での共同研究を、さらに発展させたものである。

これまで研究会では、平時における軍事被害の実態について学際的な考察を深めていくなかで、新たな研究課題が浮かび上がってきた。それは第一に、軍事施設を単なる地域の「迷惑施設」と捉える視点の限界や、自分たちの暮らす地域にある軍事施設から、米軍が戦地に行くことに、加害者として間接的に関わっているのではないかと、という問題意識に関することである。第二に、軍事化の拡がりによる被害の拡大を生み出す社会構造に関することである。第一の点に関して、トランスナショナル・ネットワークを形成して取り組む社会運動に関する研究や、軍事施設の位置づけに関する研究の必要性が研究会で示された。そして、第二の点に関しては、シンシア・エンローの研究(『策略 女性を軍事化する国際社会』岩波書店、2006年)に代表される、ジェンダーの視点からの軍事化への批判や、軍事基地周辺で起きている被害に関する研究の必要性が示された。これらの点を踏まえて、本研究では以下の2. 研究の目的に記した課題への取り組みを開始した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、軍事が社会に与える被害を個人や地域社会、社会規範など多角的な視野で捉え、実証研究に基づいて被害の実態について明らかにすることである。本研究は、不可視化されやすい軍事被害の実態を、沖縄や日本本土、さらにトランスナショナルな視野を持ち太平洋諸島などにも射程を伸ばし、各地域でのフィールド調査を通して解明し、被害の発生要因や被害を不可視化させる共通の問題構造を析出することで、軍事被害を生み出す論理について総合的に検証することである。

本研究を進めるために研究会を継続しながら、以下の三点を課題として掲げて共有し、研究に取り組んでいった。その三点とは、第一に、「軍事施設」と地域コミュニティの関係を問い直すことである。沖縄県辺野古での普天間代替施設建設問題や山口県岩国市での厚木基地からの空母艦載機移駐問題、京都府京丹後市経ヶ岬において、近畿ではじめて米軍基地ができた事例を通して、これらの各地域での事例を比較しながら、米軍基地の建設や拡張・機能強化が地域社会に何がもたらしたのかを解明することが、研究会としての課題であり、本研究の目的であった。

研究会としての課題として、第二に、トランスナショナル・ネットワークの拡がりを明らかにすることである。米軍基地問題では、基地建設や拡張に反対する住民相互の横のネットワークが形成されている。そうした動きは外国での運動との連帯につながっているが、他方で、自らの地域に軍事施設を呼び込み、「加害」をさらに生み出そうとする動きも、国内外にある。また、グアム政府やハワイ政府なども、地域住民の意向を無視し、軍事施設を呼び込もうとしている。こうした状況は、「被害」のみに着目していたのでは不可視化されたままである。この点を、本研究ではさらに深化させていくことが目的となった。

研究会としての第三の課題は、ミリタリズムが引き起こす加害性／被害性の問い直しをすることである。研究代表者と研究分担者が専門とするフィールドに固有の状況や、ミリタリズムそのものに由来する、どの地域においても共通に見られる構造を峻別し、さらに理論化・体系化をはかることが、本研究の目的となった。

### 3. 研究の方法

本研究はフィールド調査と研究会によって進められた。沖縄、日本本土、グアム、マーシャル諸島など、軍事による影響を受け続けてきた各地域においてフィールド調査を実施することで、軍事が社会に及ぼす影響を個人や地域社会、社会規範など多角的な視野で捉え、実態を明らかにした。

研究会は毎年2回開催し、研究会ではそれぞれが行ったフィールド調査の成果を持ち寄り、それぞれの事例が抱える問題の検証を行い、調査結果に基づいた考察について検討した。それぞれが行った調査から明らかになった知見を報告し、考察を加え、社会における軍事による被害の実態を多角的に明らかにしていった。また、各自の専門分野の知見を提供し、異なる視座から問題を共有した。そして、研究会での報告と議論を通じて、共通する問題構造を析出することで、自分のフィールドの分析に還元した。

また、2018年9月に開催された研究会では、研究会のメンバー以外の、ジェンダーと軍事の

問題に取り組む研究者をゲストとして招き、研究発表をしてもらい、得られた知見に基づき研究会として議論をした。

#### 4. 研究成果

各自のフィールド調査と研究会の開催を続けることにより、各自が著書の刊行や論文の発表や学会報告等を行い、様々な形で研究実績を上げた。また、2020年2月22日に東京の明治学院大学で「軍事化が進む社会」という公開シンポジウムを企画し、開催した。本研究の研究代表者や研究分担者らがこれまでのフィールド調査に基づく研究成果を報告した。それぞれの報告に3名のコメンテーターがコメントし、聴衆として参加した約70名の一般の方々から各報告に対して盛んに質疑応答が行われた。なお、具体的な研究実績は、研究実績報告書に記載したとおりである。

多くの研究実績を上げたことにより、共同研究として研究成果があった。本研究での主な研究成果は、以下の三点である。

第一に、環境社会学会で軍事問題に関する研究への認知が広まり、研究の一領域として確立したことである。本研究会はこれまでも環境社会学会で共同での研究報告をしてきた。例えば、2013年6月の第47回環境社会学会大会では、「軍事被害の環境社会学」という企画セッションを立ち上げ、研究代表者、研究分担者、連携研究者の3名が各自のフィールド調査に基づいた報告を行った。本研究期間においても、2017年6月の環境社会学会大会で「軍事被害の現れかた 軍事被害への抗いかた」というテーマで企画セッションを設け、研究報告をした。また、2018年12月に開催された第58回環境社会学会大会では、「環境社会学からの軍事問題への接近」というテーマでシンポジウムを企画し、研究代表者や研究分担者らが各自の研究成果を報告した。このシンポジウムでの企画に基づき、2019年に刊行された『環境社会学研究』第25号でも上記のテーマで特集が生まれ、本研究の研究代表者と研究分担者3名の計4名が論文を発表した。これらの研究の蓄積が、2022年に刊行予定の『環境社会学事典』において、「軍事と環境社会学」という章が設けられたことにつながったといえる。

研究成果として第二に、本研究が目的としていた、「軍事施設」と地域コミュニティの関係を問い直すことと、ミリタリズムが引き起こす加害性／被害性の問い直しをするといった観点から研究が進んだことによって、軍事環境問題の加害構造・被害構造の特徴が明らかになったことである。軍事環境問題の加害構造の特徴として、意思決定権限に非対称性があり、意思決定過程が閉鎖的であることが挙げられる。軍事とは国家に独占され、軍事力の保持や行使が国家によって正当化されている。実際に住民投票の際に、「防衛や安全保障は国の専管事項」という言説が自治体や住民に対して示され、軍事による加害が正当化されてきた。そのため、被害者が対抗力や要求提出力を発揮する回路は極めて貧弱であり、それが問題解決を阻んできた要因の一つである。つまり、意思決定過程が閉鎖的であるがゆえに、異なる価値観に基づく異なる選択肢が排除され、閉ざされた場での国による決定を唯一の選択肢として正当化しやすくなるのである。そのため、被害の不可視化や過小評価・矮小化が起こりやすく、被害が社会的に隠蔽されたり、放置されやすいといえる。被害者や地域社会が置かれた状況を、社会構造的な観点から解明することで、特定の地域に固有の問題としてのみその被害を捉えるのではなく、共通する問題構造があることが明らかになったといえる。さらに、「受益圏・受苦圏論」を問い直し、軍事基地によってもたらされる国防という財の受益者だと、軍事基地周辺以外の地域に住む人々が自身を見なすこと自体が、受益概念が「軍事化」されているために生じているのであり、その問いなおしがなされない限り、脱軍事化した社会の実現はなされ得ないことを、研究分担者である大野は指摘した。

研究成果として第三に、本研究で研究会での議論を通して、軍事被害を正当化する国家の論理に抗する別の論理の必要性が提示されたことである。地域社会が受ける軍事被害では、加害主体である国家が、軍事力の保有および行使を独占しており、その正当性を担保するために必要な公共性を自ら措定することができるため、解決も改善も困難な問題として市民に経験され、市民の間に「あきらめ」が見られることを、本研究の研究代表者や研究分担者は指摘した。『環境社会学研究』第25号の特集に発表した論文において、市民がこの状況を甘受し、耐え続けることしかできないように見えてしまうこと自体、私たちが「国家の論理」に取り込まれているということなのではないだろうかと研究分担者である熊本は指摘し、その論理のもとで分析を行うことは「統治の道具」となってしまう危険性があるからこそ、別の論理として「環境の論理」に基づいた議論が必要であると提起したのである。

なお、このような軍事被害を正当化する国家の論理に抗する別の論理の必要性とその論理の持つ性質については、研究代表者が『環境問題の社会学』（茅野恒秀・湯浅陽一（編著）、東信堂、2020年）の第6章「環境制御システムと軍事システム」でも論じた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計45件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 朝井志歩	4. 巻 46
2. 論文標題 岩国基地への空母艦載機移駐問題をめぐる地域社会の変容 -米軍基地がもたらす被害とは何か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 愛媛大学法文学部論集 人文学編	6. 最初と最後の頁 45-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 長島怜央	4. 巻 58(2)
2. 論文標題 標的のアメリカ植民地 北朝鮮の核・ミサイル問題におけるグアムと北マリアナ諸島の人びと	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 31-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 長島怜央	4. 巻 2
2. 論文標題 書評論文：キース・L・カマチョ『戦禍を記念する：グアム・サイパンの歴史と記憶』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 277-285
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 長島怜央	4. 巻 21
2. 論文標題 不可視化されたマイクロネシアの 要石 と 捨て石 石原俊の群島研究をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 クアドランテQuadrante	6. 最初と最後の頁 23-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 熊本博之	4. 巻 919
2. 論文標題 辺野古に積み重ねられた記憶について 住民たちの23年、そして64年	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 53-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 42
2. 論文標題 『危機の時代』において沖縄を生きるということ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 PRIME	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永井友昭・大野光明	4. 巻 6
2. 論文標題 宇川とわたし これまでとこれからに思いをはせる	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Hello!Ukawa	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 3384
2. 論文標題 文学的想像力が世界をつくる 沖縄を生きるために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池尾靖志	4. 巻 918
2. 論文標題 南西諸島 知られざる複数の基地建設	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 113-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊本博之	4. 巻 29
2. 論文標題 国土のランドデザインと沖縄 - 振興事業の変容と生活圏への影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 地域社会学会年報	6. 最初と最後の頁 27-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊本博之	4. 巻 45(20)
2. 論文標題 カギ括弧を取り外した辺野古を描き出す	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 138-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長島怜央	4. 巻 41
2. 論文標題 忘却できない植民地 北朝鮮の核・ミサイル開発とグアム	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 PRIME	6. 最初と最後の頁 57-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 3190
2. 論文標題 沖縄をめぐる歴史に向き合い、揺さぶられながら言葉をつくるー森宣雄ほか編『あま世へー沖縄戦後史の自立にむけて』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 5
2. 論文標題 電磁波を測るー見えない基地被害を追って	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Hello! Ukawa	6. 最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 10
2. 論文標題 宇川と丹後の戦争史と基地・軍隊ー増田光夫氏に聞く	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Notre critique	6. 最初と最後の頁 20-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 3207
2. 論文標題 辺野古基地をめぐる外交・安全保障の閉鎖性との闘いー新外交イニシアチブ編『辺野古問題をどう解決するかー新基地をつくらせないための提言』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 週刊読書人	6. 最初と最後の頁 4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 10
2. 論文標題 書評――森宣雄著『沖縄戦後民衆史――ガマから辺野古まで』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 同時代史研究	6. 最初と最後の頁 112-117
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹峰誠一郎	4. 巻 23
2. 論文標題 マーシャル諸島米核実験の「その後」 核災害からの「再生」・「復興」はあるのか	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 KURRI-EKR	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Seiichiro Takemine	4. 巻 39
2. 論文標題 Invisible Nuclear Catastrophe Consequences of the U.S. Atomic and Hydrogen Bomb Testings in the Marshall Islands: Focusing on the "Overlooked" Ailuk Atoll	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Hiroshima Peace Science	6. 最初と最後の頁 43-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊本博之	4. 巻 947
2. 論文標題 普天間基地移設問題における辺野古区民の不在	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池尾靖志	4. 巻 888
2. 論文標題 米軍再編の中の高江ヘリパッド問題	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 48-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長島怜央	4. 巻 950
2. 論文標題 1990年代のグアムにおける米軍用地問題とチャモロ・ナショナリズム	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 129-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長島怜央	4. 巻 117
2. 論文標題 報告】第12回太平洋芸術祭「閉会式」見物記 グアムにおける文化芸術活動と脱植民地化・脱軍事化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本オセアニア学会NEWSLETTER	6. 最初と最後の頁 9-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹峰誠一郎	4. 巻 46(2)
2. 論文標題 マーシャル諸島の米核実験被害に対する補償制度	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 環境と公害	6. 最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 28(3)
2. 論文標題 もう一つの地図を描きながら、 地域 を生きるー沖縄の地域開発をめぐる経験史から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 91-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 41
2. 論文標題 持続する反復帰論 岡本恵徳の思想から考える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アジア太平洋研究	6. 最初と最後の頁 19-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 28(4)
2. 論文標題 沖縄現代史におけるコンセンサスの政治と空間性ー櫻澤誠『沖縄現代史』への応答として	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館言語文化研究	6. 最初と最後の頁 151-158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 67(4)
2. 論文標題 『沖縄』を問題化する力学ー反公害住民運動のつながりと金武湾闘争	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会学評論	6. 最初と最後の頁 415-430
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 3
2. 論文標題 占拠空間・直接行動・日常――高江ヘリパッド建設阻止運動の広がりによせて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 越境広場	6. 最初と最後の頁 26-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 579
2. 論文標題 日米安保の変容と軍事化の力学	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本の科学者	6. 最初と最後の頁 200-205
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 朝井志歩	4. 巻 25
2. 論文標題 環境社会学による軍事環境問題研究 - 岩国基地への空母艦載機移駐問題の事例から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 71-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊本博之	4. 巻 25
2. 論文標題 環境社会学からの軍事問題研究への接近	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 7-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊本博之	4. 巻 31
2. 論文標題 東京郊外における共同性の再構築 日野市を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 地域社会学会年報	6. 最初と最後の頁 43-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長島怜央	4. 巻 4
2. 論文標題 硫黄島認識の転換を迫り、日本政府の歴史的責任を追及する 石原俊『硫黄島 国策に翻弄された130年』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 戦争社会学研究	6. 最初と最後の頁 217-220
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ronni Alexander	4. 巻 32
2. 論文標題 Reflecting on Hiroshima/Nagasaki at 75	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Peace Review	6. 最初と最後の頁 325-331
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池尾靖志	4. 巻 942
2. 論文標題 島の未来と軍事基地	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 世界	6. 最初と最後の頁 220-225
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ronni Alexander	4. 巻 22
2. 論文標題 Gendered Security: Learning from Being and Feeling Safe on the Island of Guam	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジェンダー研究	6. 最初と最後の頁 7-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 25
2. 論文標題 基地・軍隊をめぐる概念・認識枠組みと軍事化の力学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 35-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹峰誠一郎	4. 巻 25
2. 論文標題 「加害 - 被害構造」論から迫るマーシャル諸島民に対する 核実験被害 米公文書調査を踏まえて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 51-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 78(8)
2. 論文標題 ミリタリズムとネオリベラリズムは手をたずさえてやってきたー京都府京丹後市宇川の歴史と現在からの考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福音と世界	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 3339
2. 論文標題 沖縄戦証言をいま、どのように聞きとるのか 現在進行形の軍事主義への批判として 書評：三上智恵 『証言 沖縄スバイ戦史』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 読書人	6. 最初と最後の頁 3-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 7
2. 論文標題 基地を撤去する力としての歴史と日常 書評：目取真俊 『ヤンバルの深き森より』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 越境広場	6. 最初と最後の頁 230-232
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大野光明	4. 巻 3432
2. 論文標題 金武湾闘争の生存の思想・運動から近代をとらえなおす 上原こずえ 『共同の力ー1970-80年代の金武湾闘争とその生存思想』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 4-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹峰誠一郎	4. 巻 50(2)
2. 論文標題 世界の核実験被害補償制度の掘り起こしと国際比較研究： 核兵器禁止条約を踏まえて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 環境と公害	6. 最初と最後の頁 8-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竹峰誠一郎	4. 巻 7
2. 論文標題 自衛隊の『戦略的寄港』 中部太平洋のマーシャル諸島と ミクロネシア連邦にみる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 越境広場	6. 最初と最後の頁 70-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計42件 (うち招待講演 10件 / うち国際学会 8件)

1. 発表者名 朝井志歩
2. 発表標題 岩国基地への空母艦載機移駐問題をめぐる地域社会の変容と住民意識
3. 学会等名 第57回環境社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 朝井志歩
2. 発表標題 環境問題としての軍事基地問題 -環境制御システム論の応用
3. 学会等名 第58回環境社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 朝井志歩
2. 発表標題 空母艦載機移駐について
3. 学会等名 綾瀬市基地問題講演会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長島 怜央
2. 発表標題 アメリカの植民地とは何か グアム・北マリアナ諸島の現在から見えるもの
3. 学会等名 中央大学人文科学研究所「南北アメリカの歴史、社会、文化」チーム公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 熊本博之
2. 発表標題 辺野古に基地を受け入れさせる構造
3. 学会等名 第91回日本社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊本博之
2. 発表標題 沖縄における自治のゆくえ 無化される民意と辺野古集落の孤立
3. 学会等名 グローバルな視座から問う沖縄・アジア・太平洋（成城大学グローバル研究センター）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊本博之
2. 発表標題 沖縄の基地問題と地方自治のゆくえ・沖縄に向き合う。本土が問われているもの
3. 学会等名 早稲田大学文化構想学部社会構築論系講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ロニー・アレクサンダー
2. 発表標題 ジェンダー化される安全保障～グアム島の「安全安心」から学ぶ
3. 学会等名 2018年度日本政治学会研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ronni Alexander
2. 発表標題 Islands as safe havens: Thinking about security and safety on Gu&aring;han/Guam
3. 学会等名 2019 RIIS Symposium, Prospects and Challenges for Establishing a Disciplinary Field of Critical Island Studies Okinawa Prefectural Museum and Art Museum（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ronni Alexander
2. 発表標題 Interrogating the international from the margins: Stories of being and feeling safe from the island of Gu&aring;han/Guam.
3. 学会等名 ISA Annual Convention 2019, TA11: Critical Narrative Approaches to Post-Colonial Studies（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ronni Alexander
2. 発表標題 My story
3. 学会等名 ISA Annual Convention 2019, “Telling Stories II: Autobiography, Auto-ethnography, and Narrative Politics（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大野光明
2. 発表標題 宇川の米軍基地建設問題
3. 学会等名 丹後・宇川のおむすびを食べながら話す会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹峰誠一郎
2. 発表標題 軍事問題の加害 - 被害構造      マーシャル諸島の米核実験被害を踏まえて
3. 学会等名 第58回環境社会学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹峰誠一郎
2. 発表標題 ヒロシマとマーシャル諸島を結ぶ      グローバルヒバクシャの視点から
3. 学会等名 広島大学平和センター記念国際シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 竹峰誠一郎
2. 発表標題 グローバル・ヒバクシャからみるヒロシマ・ナガサキ      被爆者からヒバクシャへ
3. 学会等名 第17回日本国際文化学会全国大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野光明
2. 発表標題 軍事基地があるということ
3. 学会等名 辺野古リレー主催「喫茶・辺野古リレー」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 熊本博之
2. 発表標題 辺野古で進む軍事化の実態
3. 学会等名 環境社会学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長島怜央
2. 発表標題 アメリカにとっての北朝鮮のグアム包囲射撃計画
3. 学会等名 第35回日本オセアニア学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Reo Nagashima
2. 発表標題 Hidden Colonialism?: The Military Buildup on Guam, American Nationalism and Japan
3. 学会等名 International Studies Association, International Conference 2017 International Studies Association, International Conference 2017 Hong Kong (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ronni Alexsander
2. 発表標題 Expressing Safety: Bases, Radiation and Stories of feeling safe in Gu&aring;han/Guahan
3. 学会等名 International Studies Association, International Conference 2017 Hong Kong (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹峰誠一郎
2. 発表標題 マーシャル諸島 米核実験のその後 「復興」・「再生」を問う
3. 学会等名 環境社会学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Seiichiro Takemine
2. 発表標題 Still Living with Nuclear Fallout in the Marshall Islands: Looking at the Fear of Climate Change
3. 学会等名 International Studies Association, International Conference 2017 Hong Kong (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yasushi Ikeo
2. 発表標題 Rapid militarization in Okinawa: The Anti-Base Construction Movement and Sacrifice of Daily Life
3. 学会等名 Asia-Pacific Peace Research Association (APPRA) Conference 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 朝井志歩
2. 発表標題 環境制御システムと軍事システム
3. 学会等名 第89回日本社会学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 熊本博之
2. 発表標題 国防役割を与えられた沖縄における「生活圏の破壊」と抵抗の可能性
3. 学会等名 地域社会学会第41回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 ロニー・アレキサンダー
2. 発表標題 What Color is Independence? Stories of safety and decolonization in the Pacific.
3. 学会等名 ISA 2017 ISA Annual Convention 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 ロニー・アレキサンダー
2. 発表標題 ポーパキと一緒に考える太平洋島嶼国の「安全」・「安心」
3. 学会等名 日本平和学会2016年度秋季研究集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 ロニー・アレキサンダー
2. 発表標題 Is Peace the same color in different languages? Challenges of Working with Popoki to Chamoru
3. 学会等名 Inaugural FESTPAC Indigenous Language Conference
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長島怜央
2. 発表標題 1990年代のグアムにおける米軍用地問題とチャモロ・ナショナリズム
3. 学会等名 歴史学研究会（2016年度研究大会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長島怜央
2. 発表標題 キース・L・カマチヨ著『戦禍を記念する：グアム・サイパンの歴史と記憶』（岩波書店、2016年）へのコメント
3. 学会等名 戦争社会学研究会（関東例会（合評会））
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長島怜央
2. 発表標題 陳玉苹「日本統治期の台湾とパラオにおける民間経済組織：生産組合と無尽からの比較」へのコメント
3. 学会等名 京都大学アジア・太平洋海域世界縦横プロジェクト
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 長島 怜央
2. 発表標題 日本におけるマリアナ諸島米軍増強問題
3. 学会等名 日本オセアニア学会 (2017年度研究大会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 竹峰 誠一郎
2. 発表標題 Pursing a Method for Approaching Invisible Nuclear Disasters : From the Perspective of “Global-Hibakusha”
3. 学会等名 International conference Chernobyl accident and society: 30 years after catastrophe (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 竹峰 誠一郎
2. 発表標題 太平洋マーシャル諸島における核実験補償制度
3. 学会等名 環境経済・政策学会2016年大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 竹峰 誠一郎
2. 発表標題 Invisible Nuclear Catastrophe on the Marshall Islands: Focusing on Ailuk Atoll
3. 学会等名 Marshall Islands Nuclear Legacy Conference
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大野光明
2. 発表標題 社会運動研究の今日的課題 安保法制反対運動から考える
3. 学会等名 社会運動・集合行動研究ネットワーク キックオフ・コンファレンス
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大野光明
2. 発表標題 「『沖縄』を問題化する力学をめぐる歴史社会学 日本『復帰』以降の言説分析
3. 学会等名 日本社会学会第89回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長島怜央
2. 発表標題 太平洋地域における米軍基地問題の近年の動向 - グアム、北マリアナ諸島、沖縄
3. 学会等名 アジア・アフリカ研究所月例研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長島怜央
2. 発表標題 「対テロ戦争」下の経済的徴兵制 太平洋諸島出身の米軍兵士の経験
3. 学会等名 越境暴力研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長島 怜央
2. 発表標題 グアムの米軍基地と地域社会
3. 学会等名 琉球大学島嶼地域科学研究所、2019Lecture Series第5回
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大野 光明
2. 発表標題 軍事化と脱軍事化の相克－京都府京丹後市丹後町宇川における米軍基地建設問題を事例に
3. 学会等名 日本社会学会第92回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 竹峰 誠一郎
2. 発表標題 世界の核被害者に対する援助措置 広島・長崎、マーシャル諸島、セミパラチンスクの相互比較
3. 学会等名 日本平和学会春季研究大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計13件

1. 著者名 Reo Nagashima	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Guampedia	5. 総ページ数 203
3. 書名 How Do the People of Guam Understand Historical Injustice?: The Beginning of the Commission on Decolonization and Color-Blind Ideology," 3rd Marianas History Conference Book 3 (e-publication)	

1. 著者名 大川 史織(編著), 竹峰誠一郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 みずき書林	5. 総ページ数 416
3. 書名 マーシャル、父の戦場, 「マーシャル諸島の民からみつめる戦争・核・環境 第二次世界大戦と『その後』」	

1. 著者名 長島怜央	4. 発行年 2017年
2. 出版社 旬報社	5. 総ページ数 188-197
3. 書名 21世紀国際社会を考える 多層的な世界を読み解く	

1. 著者名 熊本博之	4. 発行年 2016年
2. 出版社 太郎次郎社エディタス	5. 総ページ数 24
3. 書名 共生の社会学 ナショナリズム、ケア、世代、社会意識	

1. 著者名 長島怜央	4. 発行年 2016年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 22
3. 書名 グローバル・サウスとは何か	

1. 著者名 大野光明	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ハーベスト社	5. 総ページ数 2
3. 書名 知のフロンティア 生存をめぐる研究の現場	

1. 著者名 長谷川公一(編著),朝井志歩(第7章の執筆担当)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 有斐閣	5. 総ページ数 376,pp.141-163
3. 書名 社会運動の現在 - 市民社会の声,第7章「米軍基地をめぐる運動」	

1. 著者名 茅野恒秀・湯浅陽一(編著),朝井志歩(第6章の執筆担当)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 330,pp.227-262
3. 書名 環境問題の社会学 - 環境制御システムの理論と応用	

1. 著者名 熊本博之	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 368
3. 書名 交差する辺野古 - 問い直される自治	

1. 著者名 Ronni Alexander	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 165,pp14-21
3. 書名 Teaching Peace with Popoki, " in Annick T.R. Wibben, Amanda E. Donahoe, Teaching Peace and War: Pedagogy and Curricula	

1. 著者名 Ronni Alexander	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 295,pp. 151-160
3. 書名 Some Questions from Popoki for Betty Reardon about Gender and Teaching/Learning/Creating Peace," in Snauwaert, Dale, ed. Exploring Betty A. Reardon's Perspective on Peace Education: Looking Back, Looking Forward	

1. 著者名 Ronni Alexander	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 27-36
3. 書名 Gender, Structural Violence and Peace," in Caron E. Gentry, Laura J. Shepherd & Laura Sjoberg, eds. Routledge Handbook of Gender and Security	

1. 著者名 大野光明・小杉亮子・松井隆志(編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 「1968」を編みなおす - 社会運動史研究2	5. 総ページ数 232
3. 書名 新曜社	

(産業財産権)

〔その他〕

2020年2月22日に東京の明治学院大学で「軍事化が進む社会」という公開シンポジウムを企画し、開催した。本研究の研究代表者や研究分担者がこれまでのフィールド調査に基づく研究成果を報告した。それぞれの報告に3名のコメントーターがコメントし、聴衆として参加した約70名の一般の方々から各報告に対して盛んに質疑応答が行われた。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	長島 怜央  (NAGASHIMA Reo)  (10626039)	東京成徳大学・国際学部・特任准教授   (32683)	
研究分担者	池尾 靖志  (IKEO Yasushi)  (20388177)	立命館大学・産業社会学部・非常勤講師   (34315)	
研究分担者	Ronni Alexander  (ALEXANDER Ronni)  (40221006)	神戸大学・国際協力研究科・教授   (14501)	
研究分担者	竹峰 誠一郎  (TAKEMINE Seiichiro)  (40523725)	明星大学・人文学部・教授   (32685)	
研究分担者	熊本 博之  (KUMAMOTO Hiroyuki)  (80454007)	明星大学・人文学部・教授   (32685)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	大野 光明  (ONO Mitsuaki)  (80718346)	滋賀県立大学・人間文化学部・准教授    (24201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関